

万葉の川心

物に寄せて思を陳べたる歌

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

(巻第十一 二四七八番歌)

あきかしわ 潤和川辺の 小竹の目の
 他人にはしのべ 君にあへなく

ベルトコンベヤーで流されてくる餅を右手で取り、左手で柏の葉を巻いて、またベルトコンベヤーに戻す。学生時代に大きなパン工場でした短期のアルバイトだ。一日中白い餅に葉を巻くという簡単な仕事。手先も器用な方だし、体力もあるから軽い軽い・・・と思っていたのは初めだけ。慣れてくるとスピードアップして、ラインも二列になる。巻いても巻いても次々流れてくる餅を恨めしく思ったり、ラインの前の人が残した餅が多すぎるっと密かにカリカリしたり。午前中でへとへとになって、休憩室では何年かぶりに昼寝をした。機械の調子が悪くなってくれと祈り、間に合わなくなると「もう無理だっ」とラインの手前に餅を転がし時間を稼ぐ。「次にみそあん入ります。」の声に、「何餡でも一緒やっ」と心で叫びつつ己と戦った。機械の一部になつたようなまさに初めての感覚だった。社員を尊敬した。柏餅班の学生メンバーは、恋に落ちる間もなく、ゴールデンウィーク中ただひたすらに柏葉を巻き続けた。

柏は百人一首に四首詠まれている。実際の分類では、「櫛・櫛」の字が本来の「ブナ科のカシワ」だったという。中国では「柏」はヒノキ科であり、マツと並び称された植物だが日本にはなかった。漢字に対して和語を充てる際、松柏は長命の象徴で非常にめでたい葉ということで、日本古来の神事に用い



静岡県富士市を流れる潤井川

られる「ブナ科のカシワ」にしたらしい。「柏葉を束ねて竹のひごで結んだ葉盤の皿の上に神饌を乗せる」「山火事や噴火の後に真っ先に生える生命力」などが理由のようだ。「秋柏」とは紅葉という説と熟実をたわわにつけた状態という説がある。一方、この歌は「しの小竹」に寄せて詠まれている。所在は不明だが、静岡県富士市を流れる潤井川かと本にあり、訪ねてきた。春まだ遠い寒さだったが川岸の梅は温かく迎えてくれた。潤井川と言えは「小竹」。シノは網戸、籬（垣根）などの用材として使われ、篠笛もある。そういえば先日、竹製の箴（おさ）という機械の道具を見せていた。緯糸を打ち込むのに用いる機械の心臓部で、見事な等間隔で竹が櫛のように細かく並んで組まれている。いわゆる道具なのだが、それは人の手が作り出す芸術品だった。「柏葉が霧に濡れて潤っている潤井川の川辺、そこに生えている小竹で編んだ籠の目の細かさゆえに、他の方なら隠すこともできましたが、あなた様には堪えられません。」恋しい想いが光のように水のようにあふれて隠しきれない。古代は住居の出入り口にシノで編んだ簾を垂らして、その細かな編み目から朝の光が差し込んでくることから、シノノメは「夜明け」を意味する。シノが語源の「しなやか」という言葉もある。山や川辺に生える小竹は、職人の手を経て美しい道具・生活に無くてはならない物となり、言葉が生まれ、時代を経てもお人々の心を魅了する。改めて人の手の素晴らしさを思いつつ、潤井川を後にした。

工場で情けないスタートを切った自分でもなんとか慣れ、柏葉なら任せてという訳が分からない自信とやりがいが見えた頃に、終わりの日が来た。「次はクリスマスケーキの頃にまた来て。今度はちょっとおしゃれだよ。」ごめんさい、オシャレにやれる自信がありません・・・と笑顔の下、心の中でつぶやいた。